第四章●概括

雄躍期

1955–1976

昭和三〇–昭和五一

中・高一貫教育の開花

昭和二五年に勃発した朝鮮戦争にともなう特需によって日本経済は立ち直り、昭和三〇年代から始まる高度成長期に突入する。このころを境として、本校の生徒の意識にある種の変化が生まれたのは確かである。「質実剛健」を旨とする石桜精神に対してあまり関心を示さない層が増え、なかには拒絶反応を示す生徒も現れた。多くの家庭で生活についての不安がほぼ解消し、あまつさえ消費が美徳とされる時代が到来するに及んで、質実剛健の気風が一時色褪せた過去の遺物のように感じられ、代わって快楽主義・刹那主義が幅をきかせるようになったのは、ある程度仕方のないことだったのかもしれない。

山中順三が第四代校長に就任したのは、そのようなきざしが見えだした昭和二九年であった。生徒の無気力化を防ぐため、山中新校長はことあるごとに「石桜精神に還れ」と呼びかけた。その具体的な姿とは、イ

ギリスのパブリック・スクールが目標として掲げるジェントルマンシップとラグビー精神であり、岩手中・高生は、自制、義務に忠、約束厳守、公明正大、親切、慈善、作法・服装の正さなどを身につけたジェントルマンであるとともに、ねばり強いファイトの持ち主でなければならないというのが山中校長の考えだった。

山中校長の就任後まもない昭和三〇年の夏に野球部が悲願の甲子園出場を果たした。在校生や教職員、父兄や卒業生を含む本校関係者のすべてが血をわき立たせたことは言うまでもない。練習場に恵まれない悪条件を地道な努力で克服し達成したこの快挙は、まさに石桜精神の見本である。

さかのぼれば、戦後いちはやく対外試合で好成績を挙げたのは水泳部だった。ただ残念なことにホームプールを持たず、あちこちに出向いて練習する不便が続いていたが、昭和三〇年に岩手高等学校プールが完成、存分な練習でさらに強さを増した水泳部は黄金時代を築き上げた。

もちろん、野球部、水泳部のみならず、各運動部・文化部がそれぞれに実績を積み重ねていった。とくに戦前・戦中とちがうのは、文化部が量的にも質的にも充実したことである。県・東北および全国規模のコンクールで好成績を収めた文化部だけを並べてみても、出版委員会（石桜新聞の発行）・生物部・演劇部・英会話部・絵画部・書道部・吹奏楽部など多数にのぼる。

このように、さまざまな分野で生徒の能力が開花し、めざましい活躍ぶりを示した要因のひとつに、中学・高校一貫教育体制が挙げられる。教師から生徒へ、先輩から後輩への指導を六年間もじっくりと継続できる利点は大きかったのである。

しかし、六年間の一貫教育体制にも危機が訪れた。多数の公立中学校が設立されたこと、ベビーブームのころ生まれた子供たちの就学期が過ぎて学齢人口が退潮しはじめたことによって、岩手中学校への入学志願者が年々減少したのである。ついに昭和四六年度からは中学の生徒募集を停止せざるを得ないという非常事態に立ち至った。

当然、伝統ある「岩中」の名が消え去るのを惜しむ声が高まった。その気持ちをもっとも強く感じていたのは、おそらく三田義一理事長に他ならなかったであろう。六年間の一貫教育こそが本校の精神であるとの信念のもと、岩中復活の構想が練られた。

昭和四八年、山中校長が病気のために退職し、遠藤貫中第五代校長が誕生した。三田理事長は遠藤新校長と協議し、昭和四九年度から岩手中学校の生徒募集を再開することを決めた。前途の苦難は予想されたけれども、全校が「石桜精神」の旗印を掲げて一致協力し、建学以来の伝統をさらに大きく飛雄させようとする姿勢を明確に打ち出した英断である。

昭和五一年、本校は記念すべき創立五十周年を迎えた。